
聖杯戦争、イレギュラー入り

無銘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖杯戦争、イレギュラー入り

【Nコード】

N5458P

【作者名】

無銘

【あらすじ】

Fateの世界に飛ばされた主人公が、衛宮士郎のヘルプになる予定の話。たぶんグダグダになると思うので、原作重視の方には目の毒です。異論のある方は『絶対に』読まないでください。

誤字脱字は随時受け付けていますが、作品の文句は一切受け付けません。

注：ゼロ魔で書いてる「暗殺者と魔法使い」は関係ありません。したがって、何故か一部の方に人気のある、「暗殺者と魔法使い」の

ハサンは出ない予定ですが、出るかもしれません。

プロローグ（前書き）

ゼロ魔ネタ考えてて、F a t eネタ思いついたので投稿してみました。

両立させるつもりではありますが、両立できなかったらスイマセン。

プロローグ

P r r r . . . P r r r . . .
P r r r . . . P r r r . . .
P r r r . . . P r r r . . .
P i

「はい、もしもし？」

『おう、やっと出たか。』

ワシワシ。ワシじゃよ。』

「・・・オレオレ詐欺じゃなくてワシワシ詐欺ですか？斬新ですね。あいにく、俺の祖父は二人とも故人ですのじゃ。」

電話を切ろうとする俺に、電話をかけてきた相手は慌てたように告げた。

『待つんじゃ、山本朝也君28歳（仮）！！』

「かつこ飯 って何だよ！？」

かつこ飯 って！！」

思わずツツコンでしまった。

電話かけてきた相手に かつこ飯 って名前＋年齢につけられたの、生まれて初めてだよ。

生身の相手でも言われたことはないけど。

『ふう、やっと話を聞いてもらえるわい。』

「誰が聞くかああっ!!」

俺は今からバイトに行くんだ。

知らねえ爺さんの相手なんぞしてられるか!!」

再び電話を切ろうとする。

『待て待て、待つんじゃない。プリーズ。』

「はいはい。119番にでも掛けたら相手が来てくれますよ。」

『あゝ、もう良いわい。』

実は、ワシは神様と呼ばれる存在なんじやが、
山本君、君に折り入って頼みがある。』

「ああ、宗教でしたか。あいにく俺は無神論者なんです。」

『宗教の勧誘と一緒にするでない。
君、型月のFateは知つとるか?』

「宗教の勧誘じゃなかったらボケ老人だろ!!
んで? Fateがどうした?」

『なかなか極端な性格じゃのう。
実は最近、色んな世界で転生が流行っておってな。
その際に、必ずと言っていいほど、
アーチャーの”無限の剣製” か ”王の財宝” を持たせると要
求されとるんじゃない。』

「ほう。興味深いな。」

『 ”王の財宝” は、某青いネコ型ロボットのポケットと大差は無いから良いんじやが、

”無限の剣製”の方は、言ってしまうえば個人の才能じや。

その才能を他人につけるとなると、その分だけ、

”無限の剣製”を覚える才能を無くしてしまった衛宮士郎が増えるんじや。

要するに、原作ブレイクじやの。』

「それと俺と、どんな関係が？」

『君と衛宮士郎とは、極めて魂の形が酷似しておる。

したがって、君に衛宮士郎の手助けをして欲しいのじや。』

「は？何言つてんだ？

一般人の俺が、固有結界なんて教えられるわけないだろ。」

『手助けというても、固有結界を教えろと言うておるわけではない。

君に8人目のマスターとして参加して欲しいのじや。

出来れば参加して欲しいが、断ってくれても構わん。』

「8人目？

つてことは、サーヴァントは金ぴか様？それとも真アサシン？

それに、断ってもいいだと？

んじや、さっきまでの勧誘はなんだったんだ？」

『サーヴァントはイレギュラークラスじや。

断っても良いと言った理由は、君がこの電話に出たからじや。』

「プリーズ、もっと分かりやすく言え。」

『お願いなのに命令形！？まあいいわ。』

君は平行世界を知つとるか？いわゆる、”もしも”の世界じゃな。君が電話に出たおかげで、君が今断つたとしても』

「”断らなかつた俺”が居る世界がある、ってことか。」

『ま、まあ、そういうことじゃな。』

「おもしろい与太話をアリガトよ、爺さん。」

『行ってくれるかの？』

「できるもんならやってみろってんだ。」

『なら、了承してもらったということ・・・いざ、F a t eの世界へ行くがよい!!』

そのセリフを最後に、俺の意識はブラックアウトした。あゝ、本物だったのか・・・

こんにちは、異世界

「ううん。・・・此処はどこだ？」

目が覚めると、俺は公園のベンチに居た。

ポケットを探ると、わずかばかりの金が入った財布と何枚かのメモと携帯。

それに上着のポケットにはタバコと愛用のジッポ―。

・・・メモ？

とりあえずタバコに火をつけ、メモを読んでもみる。

『ハロハロ。君がコレを読んでもおるということは無事に冬木に着いたようじゃな。』

あやつく燃やしたい衝動に駆られたが、続きを読む。

『言い忘れておったが、君がすべきことじゃ。

君には、いや、君と君のサーヴァントには最低でも7回英霊を倒して欲しい。』

7回？7体じゃなくて？

『英霊が死ぬ時に放出される魔力を回収するのが君たちの役目じゃ。したがって、バーサーカークラスのヘラクレスを7回倒してくれてもかまわん。』

おいおい。バーサーカーって、確かアーチャーでも6回殺すのが限度じゃなかったか？

しかも、1回倒した方法だと死ななかったような・・・

『君のサーヴァントじゃが、』

うん、此処は重要だ。燃やさなくて良かった。

『召喚に必要な聖遺物は用意出来なかった。
ごめん。』

フイ！！

会う時に備えて、対神宝具「神殺しの電動鋸」チェンソーをホームセンターで購入せねばなるまい。
会えるかどうかは分かんが。

『そのかわり、君の家を用意しておいた。
必要最低限の家電、食材も運びこんである。
ちなみに、衛宮家のお向かいじゃ。』

マジで？

『くわえて、君の魔術回路を81本にしておいた。』

ナイス、爺。赤い悪魔より多いじゃねえか。
でも、それより家の場所がちよいとマズくないか？

『君のサーヴァントのクラスは「奪^{テイカー}う者」になる予定じゃ。
君の健闘を祈る。』

OK。やれるだけやってみよう。

『追伸：この手紙は君が読み終えたら燃えるので、持っておると危

険じゃぞ。』

うおっ、危ね。水、水。

あんの爺、ふざけやがって・・・!!

やっぱり「神殺しチエーンソーの電動鋸」をホームセンターで購入せねばなるまい。

それにしても、どうするか？

やらなきゃならんことは・・・

1・聖杯戦争に介入。

2・サーヴァントと7回以上殺す。

で、俺がやりたいことは

1・桜を聖杯にしない

2・イリヤも聖杯にしない

3・できれば、葛木夫妻の結婚式に参加したい 最重要

4・鈍感な士郎に、好意を寄せている相手がいたら教えてあげる
ただし、俺が巻き込まれる場合は除く

うん、やっぱできるんだったら結婚させたいよね。

つか、これ見返りにしたら大抵の願いは令呪無しでも叶えてくれるんじゃない？

アサシン寄こせ　って言ったら、あっさり渡しそうで怖いんだけど・

士郎を探すより、先にキャスターに会ってみよう。

うまくいけば、協力してくれるかもしれんな。

そう思った俺は、タクシーを拾うと

「柳洞寺」

と、それだけ言ってキャスターに会いに行くことにした。

そういや、葛木って柳洞寺に間借りしてるんだよね？

そんなことを思いながら、俺は目を閉じた。

こんにちわ、異世界（後書き）

1 / 1 0 誤字訂正。

7 / 3 0 同上。

指摘ありがとうございました。

取引開始？

タクシーに乗ること約15分。

俺は今、柳洞寺前に居る。

問題は・・・

階段、長ええええ！！

あれか？

すでにキヤスターの陣地作成とかで俺の距離感が歪められてんのか？
とりあえず、気合を入れて階段を昇る。もう少して山門だ。
と、

「ふむ、この寺に何用かな？」

陣羽織を着た男が居た。

おそらく、つつーか間違いなくアサシンだろう。

「ある人物に会いに来た、とだけ言っておこうか。

できれば、貴殿のマスターに取り次いではもらえまいか？

俺は貴殿と違って現代人でね。

戦闘経験がまったく無いんだよ、アサシン。

ああ、無論だが当方に戦闘の意思は無い。」

「ほう？

一見して、この身をアサシンと看破するか。

察するに貴殿も聖杯戦争の参加者か？」

「ま、どっちかって言うと巻き込まれた口だがね。
とりあえず、だ。

取り次いでいただきたい。

マスターの1人が聖杯戦争の件で取引に来た、と。
まだ7騎の英霊が揃っておらぬのだろう？

だったら、まだ戦う理由は無いと俺は思うのだが、返答は如何に？」

多少、時代劇っぽく言ってみたが

やっぱ性に合わん。

次から普通にしよう。

「あら、お客様かしら。アサシン？」

上から声がした。見るとマント姿の女が浮いている。

「お主と取引に来たそうだ。」

アサシンが簡潔に答える。

「取引？ 必要ないわね。」

勝つのは私達ですもの。」

7人のサーヴァントのうち2人揃ってりゃ、普通はそう思うわな。
予想の範囲内の返答が返ってきた。

「おい、キャスター。」

取引に応じてくれれば、葛木と暮らすための新居を用意してやる。
それに・・・

そうだな、多少は他のサーヴァントの情報も付けてやる。

それでも、拒むか？」

「あらあら、それは魅力的ね。」

でも、サーヴァントについてはどの程度知っているのかしら？

言っておくけど、クラスだけではダメよ?」

「今回の聖杯戦争で召喚されるだろうサーヴァントについては、大体は分かるな。」

「信じられないわね。証拠はあるの?」

「・・・そうだな。」

アサシン、真名は佐々木小次郎。

宝具こそ無いものの、自らの剣技を宝具と同等のレベルまで高めた剣豪。

・・・とされる、架空の英雄の殻を被った名も無き剣士。技は、次元を歪め全く同じタイミングで3方向から斬りかかる『燕返し』。

山門を依り代にして召喚されたため、ここから離れられない。訂正する点はあるか、アサシン?」

思い出しながらアサシンについて言ってみる。

「む。相違ない。」

だがしかし、お主、一体どこでそれを?」

よしつ、セーフ!!

「ふふふ、さてな。」

なんなら、コルキスの王女。お前も当ててやろつか?」

「!?

結構よ。本当に知っているようね。」

「ああ、言っただろう？知っていると。」

ところで、現時点で揃っているサーヴァントは何人だ？
開始するのにセイバー待ちつてのは知ってるんだが。」

「？」

おかしいことを聞くのね。待っていなさい。」

少し待つ。

「・・・今、反応があるサーヴァントの数は6人よ。」

6人か。ギルガメッシュ金ピカを入れて6人なのか、入れずに6人なのか・

・・

一応、入れずに6人としておこう。

受肉してた筈だし。

「ありがとよ。教えてくれたってことは、取引成立って考えてもOK？」

「いいわ。乗ってあげる。」

私はどうすればいいのかしら？」

「とりあえず、降りてきてくれないか？」

上を向きっぱなしなのは、首が痛いんだわ。」

「ふふふ。ごめんなさいね。」

キャスターが降りてきた。

ああ、首が痛かった。

さあ、ここからが本番だ。

取引開始といきますか。

Let's 交渉

とは言っただものの、交渉に持ち込んだのは良いんだがこれからどうしよう？

降りてきたキャスターは、

「戦わないんでしょ？」

話し合いをするのなら、お茶が要るわね。」

と言いだし、アッサリと俺を自分達が借りている部屋に招き入れた。アサシンは門前で置いてけぼりくらった。

山門から離れられないんだから仕方ないんだろうけど・・・

ちなみに、茶は出ているが、紅茶が茶碗に入っている。

『茶』ってついてるから間違いないんだろうけど、普通は『ご飯』を入れるものじゃないのか？

井に注がれるよりマシだけど。

「協力してもらえるんだから、聞きたいことがあれば答えられる範囲で答えるが、どうする？

説明と質問、どっちを先にする？」

「『答えられる範囲』ということは、答えられない事もあるってことよね？」

だったら、貴方の企みを聞かせてもらえないかしら？」

企みとは人聞きの悪い。

「んゝ、そうだな。」

キヤスター、聖杯に意思があるって言ったら、お前信じるか？」

「何、それ？説明になってないわよ。」

「俺は信じるか？と、問うている。」

「重要なのか？」

「最重要だと言っても過言ではないだろうな。ある意味、それがこの話の前提だ。」

「はいはい、信じるわよ。」

「どう？これで満足？」

「投げやりな回答ありがとよ。」

「じゃあ、その聖杯の意思が歪んでる。」

「これはどうだ？信じられるか？」

「歪んでる？どどういうこと？」

「例えば、聖杯に『世界を平和にしてくれ』って願ったとする。現在の聖杯は、それを

『世界中から、あらゆる生物を絶滅させる』という手段で叶える。ということだ。」

「生物が完全に居なくなれば、争いは起きんのだからな。」

「出された紅茶を飲みながら語る。」

「その話が真実なら狂ってるわね。」

「実際、そうなんだから仕方ない。」

ヤレヤレとばかりに首をすくめて見せる。

「取引内容っていうのは、狂った聖杯を直すことかしら？」

「うんにゃ、むしろ逆。」

聖杯を『誰も使えないようにしたい』。

ついでに言っと、取引は全くの別問題。」

「それは一体、どういづつもりかしら？」

「3回目の聖杯戦争の時、御三家のアインツベルンがやらかしたんだよ。」

残りの紅茶をすすりながら俺は

過去にアヴェンジャーが召喚されたこと、

聖杯が取り込んだアヴェンジャーによって汚染されていることを告げた。

「ってなわけだな。」

下手に聖杯に願いを叶えてもらうと、

本人が意図しなかった形でしか叶わない可能性が高いんだわ。

極端な話、『キャスターと葛木を一緒にしてくれ。』って頼んだら

葛木が殺されて英霊なり反英霊なりにされちまうってわけ。

アレで正しく願いを叶えられる奴も居るんだらうけど、

その場合、そいつは狂人だろうな。ここまでOK？」

『赤い悪魔』の言う『エセ神父』を想像しながら言ってみる。

「で、協力して欲しいことは一応2つ。

聖杯の母体になるだろう2人の少女を救いたい。

正確には、『2人の少女を聖杯なんかにしたくない』。

その為には、お前の宝具が必要になると思う。

だから、俺に協力してくれキャスター。」

和室だったので正座してたせいもあり

頭を下げると土下座するかたちになるが

それでも、俺はキャスターに頼んだ。

「・・・」

「・・・」

「いいわ。協力しましょう。」

「ほんとか!？」

「ただし、聖杯は壊させはしない。

アレがないと、私達は現界できないから

封印するだけにすること。いいわね?」

「使えないようになるんだったら、それでいい。」

こうして、俺はキャスターと同盟を組んだ。

「とっくらでち」

「今度は何？」

「英霊の召喚ってどうやるんだ？」

L e t ' s 交渉（後書き）

オリ主のサーヴァントを楽しみにしてる感じの感想がありました。
一応、『奪う者』と言えなくもないサーヴァントを用意してあります。

正確には、テイカーはテイカーでも『奪う者』であり『得る者』なんです^^；

これだけの情報でサーヴァントを当てられたらどうしようw

英霊召喚

キャスターと同盟を組んだ俺は用意されているという家に向おうと思った。

が、気づいてしまった。

・ ・ ・住所わかんねえ。

1 ・ キャスターに頼んで、住所が分かるまで世話になる。

> 2 ・ 警察に行って住所を聞く。

2 だな。

道案内も警察の仕事だ。

衛宮と武家屋敷で大体わかるだろ。

(＊ちなみに作者は道に迷うと、コンビニで道を聞いています。意外にも大きい地図を置いてたりする。

次点は郵便局、消防署。 仕事柄なのか、詳しく教えてもらえる。)

交番を発見したので入ってみる。

「 すいませ〜ん。道を聞きたいんですけど。」

「 はい、どちらでしょう? 」

「 衛宮さんのお宅へはどう行けばいいでしょう? 最近じゃ珍しい武家屋敷なんですけど。」

「 あゝ、あの家ね。」

地図を見せてもらいながら教わる。
よし、だいたいOK。

「どうもっ！ありがとうございます！」

礼を言うのも忘れない。

これは最低限のマナーだろう。

「いえいえ。お氣をつけて。」

「はい。」

・
・
・

商店街を抜け、衛宮邸の前まで辿り着いた。
ここに向かいだったな。

この家か？表札が無いから確認できんな。
表札があっても、『山本』って苗字は多いから確定できんが。
間違ってたら、引越しの挨拶に来たことにしておこう。

インターホンを鳴らす。反応なし。

ドアは鍵が掛かっている。そりゃそうだな。
普通、留守にするんなら鍵を掛ける。

誰だってそうする。俺だってそうする。

一応試してみるか。

俺は『俺の家の鍵』を鍵穴に差し込んだ。
回すと・・・

カチャン
開いた。

俺の持つてる鍵で開いた。ということは、ここが俺の家か。
昼だから衛宮家に行っても留守だよな。

暇だ。

そうだ、英霊を召喚しよう。

気にはなってたし。

一どこの自称神様な母親が仕切る家の次男坊とか出たら・・・
うん、人じゃないから出るわけないな。ライオンだし。
出たら出たで、セイバーにモフモフさせてやる。

キャスターに教わった手順で召喚の儀式を始める。

呪文は・・・省略してもいいよな、たぶん。

士郎も唱えてなかったし。

クラスは確定してるし。

「来い、俺と共に闘うサーヴァント!!」

そう言った途端、なぜかポケットに入れておいた携帯が熱くなった
気がした。

そして、一気に体力を奪われた。

そんな気がしている俺の目の前に現れた、青い装束の少年を見て
俺はかなり驚いた。

彼は此処に、いや、この世界に存在するべき者ではない筈だ。
たしかに『奪う者^{テイカー}』なんだろうけどさ。

その少年は俺にこう言った。

「はじめまして。貴方が僕のオペレーター^{マスター}ですか？」

「あ、ああ。」

「サーヴァント『^{テイカー}得る者』、召喚に従い参上しました。

これから僕の銃は貴方と共にあり、貴方の運命は僕と共にあります。
これで契約は完了しました。

僕の真名は・・・」

「自己紹介は不要だ。俺は君を識っているからな。

俺の名は山本朝也だ。

それと、『マスター』ではなく、名で呼んで欲しい。」

「わかりました、朝也さん。」

「ところで、君は・・・どの時点でのロックマンなんだ？

よければ、君が最後に遭遇した事件を教えて欲しい。」

そつ、俺の前に現れた英雄は・・・

『^{デリート}消滅』はしても『^{ゲーム}死』とは無関係な筈の

存在する筈も無い架空の世界の英雄だった。

英靈召喚（後書き）

何故ロックマンかって？

格ゲー版 Fate の製作会社が CAPCOM だからさ。

行き着いた流れとして

奪う者
山賊・海賊
キャプテンキッド

EXライダーが元ネタだから止め
んじゃ、山賊 イネエ

!?

それなら盗賊 盗賊王バクラ 無理

行き詰ってPSPで格ゲーFatEプレイ
作ったのCAPC

OMだっ
たっけ

ロックマー……ン！！

という流れです。イレギュラーなので、能力設定もイレギュラーの予定です。

テイカーに確認してみた（前書き）

3、4月は色々あつて更新できませんでした。
すいません。

ティカーに確認してみた

「ネビュラグレイとの戦い《ロックマン・EXE 5》から4年後、

ある宇宙探査船が外宇宙から帰還しました。

でも、その宇宙船には、未知のウィルスが付着していました。

『デビル・ウィルス』と名付けられたソレは

様々なプログラムを破壊しながら侵攻を続け、

ついには核ミサイル発射プログラムにまで侵食しようとしていました。」

その話は・・・いや漫画であつたな。

コミックスオリジナルだったわけ？

「オフィシャルのナビであるブルース達『チーム オブ ブルース』が足止めをし、

僕達『チーム オブ カーネル』が『デビルウィルス』を倒す筈でしたが、

僕は途中で倒されました・・・」

そついや、何か途中でそんな描写もあつたな。

「気づいたら、朝也さん、貴方に召喚されていました。

自分が得る者であるという知識と共に。」

となると、完全に6以降だな。

助かったのは、たしかフォルテと合体してたからだつたよな。

ということは、漫画で言うところの『究極プログラム』は得た筈だ。

「1つ確認したい。」

彩斗、君に『究極プログラム』はインストールされているか？」

「はい。アンインストール出来ませんでしたから。」

「ということは、『獣化』出来るんだな？」

「出来ると思います。」

ただ・・・」

「『獣化』させる気は、今のところは無い。
危険になったら使つかもしれんが。」

連載終了時の描写見たら、

指先1つで防御プログラム壊すわ

ロックバスターがロケランみたいになってるわ

その状態で『獣化』？

令呪があっても制御しきれ自信が無いし、
むしろ怖くて使えんわ！！

「わかりました。」

「それと、もう1つ言っておく。」

確証は無いが、お前はおそらく消滅^{デリート}されていない。」

「何故です？」

「俺が知っている通りなら

『デビル・ウイルス』は『伝説の凶戦士』^{デリート}によって
消滅されているからだ。」

『伝説の凶戦士』とは、フォルテと融合した『フォルテ・クロス・ロククマン』。

つまり、お前とフォルテが融合した姿だ。

となると、片方が消滅していれば現れることはできない。」

これまた確証は無いけど、多分

人間である『光 彩斗』が死んだことで、ネットナビである『ロククマン・EXE』に生まれ変わった。

ネットナビである『ロククマン・EXE』は死なないから、正確には死なないから

人間である『光 彩斗』の死で代用したんだろう。

厳密に言えば同じ存在ではないが、遺伝子的には『光 彩斗』。『ロククマン・EXE』だから

強引に死んだと見なしたんだろう。

でなければ、テイカーとして此処に存在できない筈だ。セイバーみたいに担保があるとも思えんし。

そんな事を考えていると

「朝也さん、『神』さんからメールが届いています。」

「おう、ダンケ。

って、何で分かんのか？

つか、『神』？」

携帯を出すべくポケットに手をつ込んで聞く。

「今は朝也さんのナビですから。

『神』さんって知り合いじゃないんですか？」

「『神』を自称する爺さんは知ってるが、心当たりは無い。
つて、おい!？」

ポケットから出した携帯は
携帯ではなく、P E Tになっていた。

・ ・ ・ ・ ・

「・・・彩斗、スマンがメール読んでくれ。

P E Tの使い方が分らん。

それと、後でP E Tの基本的な使い方を教えてくれ。」

能力についての相談

「ハロハロ〜。神様じゃ。」

無事に英霊召喚できたようじゃな。

聖遺物を用意できなかったから、

その分の埋め合わせをしたいと思うぞイ。」

文章がなんかムカつく。

あ、彩斗も微妙な顔してる。

スマンが耐えろ、彩斗。

「召喚したのは「ロックマン・EXE」のようじゃな？

じゃから、バトルチップをあるだけ送っておいた。

リビングのテーブルの上を確認してくれい。」

「それと、君は魔術刻印も無いし、

魔術の使い方も知らんじやろうから、

何かの能力を付加したと思うちよる。

何が良いかは返信してくれい。」

魔術戦になるんだったら『グラムサイト妖精眼』が第一選択だな。

呪波汚染は勘弁だけど。

何か、他の代償で済まないかな・・・

「メールは以上です。朝也さんは魔術が使えないんですか？」

痛いところを・・・

「昨日まで、ただの一般人だったんだぞ？」

身内に魔術師が居るなんて聞いたこともなかったし。
そんなことより、メール読んだついでに返信も頼む。」

「そんなこと、って。」

「どういう内容にしますか？」

サージェント
奴隷というより優秀な秘書だな、オイ。

「自分の意思でオンオフを切り替えられる『妖精眼』希望。
呪波污染がイヤだから他のデメリットで代用利くか確認したい。
この2点入れとして。書体は任せる。

それが終わったら、P E Tの使い方教えてくれ。」

「了解です。」

・・・

・・・

・・・送信しました。」

「多謝。んじゃ、さつそく・・・。」

「朝也さん、『神』さんから電話です。」

「最初から電話かけてこいや！！
出たら代わってくれ。」

「どうぞ。」

「あゝ、もしもし？」

『ワシじゃ。』

『妖精眼』のデメリットを他のものにしたいということじゃったが、

具体的にはどういうものかの？」

変更できるのかよっ！？

聞いたいてアレだが。

「単純に頭痛がイヤだからな。

使用時にだけ色弱になる、とかはダメか？

色盲だと使っても役に立ちそうも無いし。」

自分から頭痛になりたい奴は居まい。

モノクロなので相手の魔術が分からなくて避けられませんでしたとか、地味にイヤだし。

『まあ、デメリット無しで『妖精眼』を使いたいとか言わんかっただけマシじゃの。

軽度の色弱にしておくぞ。

具体的には、黄色とレモン色の違いが分からなくなる程度じゃ。」

・・・それって、区別付く奴いるのか？

目の前に出されたら、迷わず両方黄色って答えるぞ、俺は。

まあ、絵の具で違う色にされてるんだから何か違うんだろうけど。

（ちなみに、Wikipediaによると、

黄色のカラーコードは#FFFF00、

レモン色のカラーコードは#FFFA50

だそうです。）

「じゃあ、それで頼むわ。

デメリットが変更されて良かった。
今だけ感謝するわ。」

『今だけって、オヌシ……。
変更されなかったらどうするつもりじゃったんじゃ？』

「ん？

『ARMS』から『クイーン・オブ・ハートハートの女王』借りるつもりだった。
相手の攻撃さえ完全に見切れる眼があれば、彩斗以外も援護できる
からな。」

『ほっほっ。オヌシは他のオヌシとは違うようじゃの。
それにしても、本名でサーヴァントを呼ぶか。
それもまた好かるう。』

「他の俺が何を要求したか知らんが、俺は俺だ。
俺のやりたい様にさせてもらう。
それに、親に付けてもらったのに
数える程度しか呼ばなかった名前だ。
せめて、この世界に居る間だけでも、
ちゃんとした名前で呼んでやりたいじゃないか？」

・ ・ ・ ・ ・

「そっいや、俺以外の俺って、誰を召喚したんだ？」

『君は既にロックマンを召喚しておるから教えても良からう。』

面白かったのは『自称歌手』じゃな。

彼を召喚した君には『耳栓』を要求されたぞい。』

たしかに、耳栓を要求されると面白いな。

それにしても、能力付加を犠牲にしても耳栓が必要な程、音痴な自称歌手で、

誰かから強奪するような男・・・？

！！

なるほど。

・・・さしずめ宝具は『一俺の物は俺の物、お前の物も俺の物』^{ジャイアンニズム}つかてか？

確かに『奪^{テイカー}う者』にはうってつけだ。

奴なら宝具でも奪いかねん。

能力についての相談（後書き）

誤字脱字報告は随時受け付けておりますが、作品に対する文句は受け付け拒否しています。

申し訳ありませんが、作品に対する文句がある場合は読むのを辞めるか、我慢して読むか、どちらか選択してください。

いざ、出陣？

彩斗を召喚してから3日が経過した。

その間に、俺は彩斗にPETの使い方や、バトルチップの使い方を教わった。

しかし、だ。

普通の携帯で慣れていた俺は、PETが使いこなせない。バトルチップは使える。

携帯のSDカードを交換するようなもんだから。

でも、基本的な使い方となると携帯電話とは違いすぎる。

そんなわけで、俺が出した結論は・・・

「メールが届いたら、内容を読み上げてくれ。」

これだ。

彩斗の本来のパートナーである熱斗もやってもらっていたことだ。そう思って彩斗に頼んだら

「ネットナビはPETを使うのをサポートするのが役目ですから、良いですよ。」

あっさりと引き受けてくれた。

「聞いたいてアレだけど、本当にいいのか？」

戦う以外にも仕事を押し付けてしまうんだが？」

「熱斗君にも、そうしてましたから。」

本当に優秀な英霊だ。

「ところで、今日も監視ですか？」

彩斗を召喚してから毎日、といっても3日だが俺は夕方以降は衛宮家を監視している。

士郎が脇目も振らず、走って帰ってきたなら、それが聖杯戦争開始に繋がるから。

そして、どうやら今日がその日らしい。

「彩斗、向いの家に挨拶に行くぞ。」

そういつて、バトルチップの束をポケットに入れる。

ちなみに、実験がてら発覚したアドバンスド・プログラム毎に束ねてある。

ゲーム内設定は有効らしい。

うれしい誤算だ。

「準備は出来てます。」

「オッケー。」

俺達は家を出て、衛宮家に入った。

慌てていたのだろう。

玄関開きっぱなし。

ま、俺達が出かける前にランサーが侵入した可能性も否定できんが、というより、家の中から何かが壊れるような音がしたあたり、ランサーは侵入済みだな。

ということは・・・

「彩斗、攻撃準備。庭に向う。
そこに青い槍兵が居るはずだから、そいつを狙え。
当てる必要は無い。威嚇射撃のつもりで。」

「了解です。」

そう言うのと、右腕が銃身。いや砲身に変わる。

「行くぞ。」

・
・
・

「ロックバスター！！」

庭に着くなり、ランサーを発見。
そのままバスターを連射させる。

「ちいつ、7人目かつ！？」

いきなりの攻撃には、ランサーも慌てたようだ。
それでもバスターを避けたり弾いたりするのは流石だ。

「テイカー、攻撃一時中止。」

「でも。」

「問題ない。」

ランサー、1つ言うておく。」

「あん？」

「俺は7人目じゃない。

8人目・・・

いや、イレギュラーだから9人目だな。」

士郎、凜、桜、イリヤ、葛木、キャスター、バゼット。

葛木はともかく、他の6人はそれぞれ英霊を召喚している。

今は違ってもバゼットはランサーが戻ればマスターに復帰できるだろうし。

そして神父。

バゼットからランサーを奪った、金ピカ王様のマスター。
これで8人。

この時点では蟲爺は、暗殺者を召喚していない。

そうすると、俺は9人目になる。

惜しいなあ。10人目だったら、

某通りすがりの仮面ライダーだったんだが。

まあ、K I V Aも好きだから問題ない。

そんな俺を訝しげに観るランサー。

「つまり、なんだ？」

聖杯戦争はとつくに始まっていたってか？」

「7騎の英霊が揃うことが開始の合図。

そういうことなら、すでに始まっていたんだろつよ。」

そう言いながら、土蔵の方をさりげなく見る。

「そして、どうやら9騎目の英霊。」

「いや、正しい7騎目の英霊が召喚されたようだな。」

そう言うやいなや。

不可視の剣持つ少女が土蔵から飛び出してきた。

交渉 その2

土蔵から飛び出してきたセイバーは
対峙している俺とランサーの間に割り込む形となった。

どうやって止めよう？

「あゝ・・・ っと。 たぶんセイバー？

俺はその子供ののの方のマスターだ。

俺達に、戦闘する意思は無い。」

倒せるかどうかは分かんないけど、

万一でも間違つて倒したら本末転倒だ。

しかし、俺と彩斗を睨みつけているのは

それが真実であると言う保証が無いからだろう。

普通に考えれば当たり前と言えば当たり前なんだが。

「もう一度言う。」

俺達には戦闘する意思は無い。」

両手を挙げて降参のポーズをとり

スグに降ろす。

「ならば何故・・・

何故、ここにサーヴァントが二人も居るのです？」

もったもな質問だ。

「いや、なんでって言われてもなあ・・・
近所でドンパチやられたら

誰だって気になって顔出すだろ？

誰だってそうする。俺だってそうする。」

セイバーの目つきが更に厳しくなる。

「でもって、見に来たら

ランサーが、お前さんのマスターだと思うんだが
少年を襲ってたってわけ。

そうしたらどうするよ？止めれるんだったら止めるだろ？
それとも何か？止めずに殺させとけって言うのか？」

続ける。

「たしかに、魔術師だとは思わなかったがな。
それでも。

強盗に襲われている力無き民を、力ある騎士が助けない。
なんて道理がどこにある！？」

言い切る。

士郎がマスターだと思わずに、助けようと手を出した。
そう思わせられるように。

興奮していて、考えずに喋っている。
そう思わせられるように。

こういうのは一気に言い切った方が、後々疑問に思わない。

「俺を信じられない、そう言うのならそれでも構わない。

ただし、その場合。」

セイバーにはすっかり忘れられているであろうランサーを指差し、

「真名が想像通りなら、

正々堂々と戦えないことを嫌がるかもしれないが、

俺達はランサーと手を組んでも

この場からお前さんを排除する！！」

「なっ！？」

この宣言にはセイバーも顔を青くした。

2対1で戦えって言われているようなものだ。

しかも、片方はランサーだと連呼されているからランサーで確定だろうが

もう片方はクラスが不明。

加えて、相手は両方とも何者なのか分からない。

チエツク。

そう思った時だった。

思わぬ方向から声が掛かる。

「面白い話をありがとよ。

でもよ、その作戦には穴があるぜ？」

いままで喋らなかったランサーが口を開く。

「俺がセイバーと手を組んで、お前から先に排除する。

そういう可能性もあるってことだよな？」

「その時は、脱落ついでに
お前さんの真名をバラしてから退場するだけさ。
たぶんアタリだろうしな。」

「くだらんハツタリは止せ。」

「だったら試してやるよ。」

「ほう？」

セイバーが反応する。

「ランサー。俺は魔術師になったばかりだ。
いまだに魔術は使えん。」

騎士コンビは 何言ってんだコイツ？ 見たいな顔してる。

「そこで宣言する。」

ランサー。お前、明日の夕刻、この場所に
晩飯を食いに来い！！」

ランサーは歯噛みするが、セイバーはわけが分からずポカーンとして
いる。

「お前から見て目下からの誘いだ。
まさか、断るまいな？

いや、聞くまでも無いな。

その様子では、俺の予想は正解だったようだな？

これで、少なくとも俺には手出しできなくなったわけだ。
というわけだ。帰れ。」

詐欺ってみた

『食事の約束を取り付ける』という、
傍から見ていて全く訳が分からない方法で
ランサーを撤退させた俺は、セイバーの方に向き直る。

「で、セイバー。」

お前さんはどうしたい？」

「どうしたい。とは？」

「無論、戦うか否かだ。」

ここに英霊が2人居る。

普通ならそれだけで戦う理由になるんだろうが、
生憎と俺達にはその気は無い。

俺達としては、戦わずに済めばそれで良いんだが。」

「その前にお聞きます。」

「ん？」

「何故、先ほどから私を『セイバー』だと決め付けているのです？」

「何故ってお前。その武器だよ。」

見えている柄を指差す。

「それ多分、諸刃の剣だろう？」

「剣かもしれませんが、斧かもしれません。あるいは弓かもしれませんよ?」

「いや、弓はムチャだろ。その柄で。

斧かもしれないってのは認めるけど、普通の斧には柄は無いし。鞘が見当たらんから剣だと決め付けるのもなんだが、斧よりは可能性は高い。

というか、柄があるような珍しい斧を持つてる女性の英雄なんて知らんぞ?」

剣を振り回す女性の英雄は心当たりがあるが。」

「ほう?」

「聞くかね?」

「ランサーの真名を当てた貴方に、興味がわきましたので。」

知ってた。なんて言えないし、セイバーの真名も知ってるなんて言えないな。誤魔化すか。

「真っ先に思いつくのは、ジャンヌ・ダルクだな。」

あ、なんか嫌な顔してる。

そっぴいや前回は変態に勘違いされた挙句、襲われたんだっけ。

「彼女は戦場には居たんだろうが、勝利に導いた、という話はあっても誰かを討ち取った、という話は聞かない。」

むしろ、軍の象徴的な存在だ。

となると、武器が剣である可能性はあるが不可視の剣である必要は無い。

その剣が宝具であると仮定するなら、

彼女の場合、旗が宝具だと考える方が妥当だろうな。よって、除外。」

指を立てる。

「しかし、彼女以外に西洋で戦場に立った女性は知らない。そうになると、考えられるのは3つだ。」

指をもう1本立てる。

「1つは 女性が戦う部族 の誰か。

しかし、俺が知る限りにおいて

その肌と髪の色は、その部族とはかけ離れている。

したがって除外していいだろう。」

もう1本指を立てる。

「2つめは、北欧神話で言うワルキューレ。

あるいは、その元になった誰か。

髪や肌の色からは否定できんが、

彼女達は馬に乗って戦死者の魂をヴァルハラに迎えると言われる。

そうになると、セイバーよりはライダーに該当するだろう。

こちらも除外していいと判断できる。」

立てた指を1本に戻す。

「最後は、男装の麗人。

しかも、女性であると思われなかった人物。」

指を立てたまま続ける。

「この場合、男らしい逸話が必要になる。

女であることを微塵も疑わせない事が前提になるわけだから。」

今回の正念場はここかな？

「結婚していても、子が居なかった。

又は独身だった者はお前の正体に該当する可能性はある。

子を成すには結婚していても

女性同士では子は産めないわけだから、

子が居たという伝説がある人物は除外される。

そうになると、そうだな・・・

例えば円卓の騎士でも、

子が居たとされるアーサー王やガウェイン卿等の

いわゆる円卓の騎士は一部除外されるが、

修道院に入ったとされるランスロット卿やヴェイヴェール卿は否定できんな。」

セイバーは依然黙ったままだ。

わざと真名を外したみたがどう出る？

「特にランスロット卿は、

トランプのクラブのジャックのモデルになったと言われている。

トランプは世界中にありふれているし、

そういう意味では世界的に有名な騎士だろう。

お前さんのマスターが何を媒介にして呼んだか知らんが

トランプだったら、ランスロット卿かも知れん。」

さて、頃合かな。

「が、それも否定だな。」

「何故です!？」

セイバーの声に反応するかのように、
今まで黙りっぱなしだった彩斗が身構えた。

「説明してもいいんだが、お客様のようだ。
やれやれ、今日は厄日か?」

死人に口無し

「なんで此処に英霊が2人も居るのよ!？」

おお、赤い悪魔だ。

「なんでって言われてもなあ。
なりゆき？」

「どんななりゆきよっ!？」

「いあ、ランサーが此処に入るのが見えたから入ったんだが、
戦ってたら、女の子が召喚された。

ランサーは帰った。

あ、俺はそっちの少年のマスターな。

今のところ戦うつもりはないからアーチャー引っ込めてもらえると
助かる。」

「アーチャー。」

「了解だ、凜。」

凜の一声で構えを解くアーチャー。

「テイカー。」

「わかりました、朝也さん。」

こっちも構えを解かせる。

ついでに、死人に口無し　ってのを利用させてもらおう。

「戦わないついでに見逃してくれない？
ちよつと会いたい人が居るんでな。

戦いたければ、後日にしてくれると助かる。」

「何でよ？」

「なりゆき　って言っただろ？

なりゆきでマスターになつたからな。

聖杯戦争についてはほとんど何も知らん。

だから、経験者に聞きたくてな。」

「経験者？」

「おう。衛宮つて家知らないか？

切嗣つて人が前回の生き残りだから話を聞きたいんだが。」

目を丸くするセイバーと凜。

アーチャーは・・・普通だな。

「衛宮なら、ここがそうだ。」

アーチャーが答える。

「訪問する手間が省けた。

セイバー、悪いがお前のマスターを呼んでくれ。
切嗣がどこに居るか聞きたい。」

「・・・わかりました。」

そういうとセイバーは土蔵に引つ込み、
暫くして、士郎と一緒に出てきた。

あれ？

士郎ってセイバーとランサーの戦い見てなかったっけ？
ま、いいか。

「こんばんわ、衛宮君。」

「遠坂・・・と、そっちは？」

「こんばんわ&はじめまして。

俺は山本という。隣に居るのはサーヴァントのテイカー。」

「はじめまして。」

「はじめまして、衛宮士郎です。」

「ときに、士郎君。切嗣氏は何処だい？
彼に尋ねたいことがあるんだが。」

「親父は死にました。
もう5年になります・・・」

悲しそうにそれだけ言う。

「そうか・・・
惜しい人物を亡くした。」

こちらも残念そうに言う。

「親父を知ってるんですか？」

「ああ、前回の聖杯戦争の勝者らしいね。

彼から話を聞ければ何か掴めるかと思ったが、
どうやら、そこまでうまい話は無いらしい。

線香を上げさせてもらっても良いかい？」

「構いませんよ。」

「では、失礼する。」

そう言つて、玄関に回る。

回ったところで頭だけ出す。

「そうそう。遠坂さんだったか？」

貴女も故人に線香を上げた方が良いんじゃないか？
前回の勝者だ。ご利益があるかも知れんぞ。」

真実の中の嘘

家主の許可を得て家に上げてもらった俺達は

俺、彩斗、セイバー、凜、アーチャーの順に線香を上げた。

今はちやぶ台を囲んで座ってる。

「改めて自己紹介しよう。

俺は山本朝也。隣に居るのがサーヴァントのテイカー。

なりゆきで戦争に参加することになった。

理由は言えないが、目的は聖杯の封印もしくは破壊。

あ、士郎君。灰皿ないか？」

いきなり爆弾投下。

キれるのはセイバーかな？凜かな？

「壊すってどういうことよっ！？」

「壊すとはどういうことですかっ！？」

Answer：両方だった。

OK、落ち着け。

「落ち着きたまえ、凜。」

意外にも場を鎮めたのはアーチャーだった。

「アーチャー！！！」

「その男が言っていた事を考える。」

「聖杯を封印するか壊すんでしょ。」

「その前だ。彼は『理由は言えない』と言った。つまり、故意に言わないのではなく、何か理由があつて言えないのではないかね？」

理由？

イリヤの実家がしでかしたことで

イリヤに対する要らん先入観を持たせたくないだけだよ。

「察しがいいな。その通りだ。

だから言わないのではなく言えない。

もつとも、その時になれば言えるようになるだろうがな。」

イリヤをこっちに引き込んだ後とかな。

「壊せるかはともかく、封印できるならそれにこしたことはない。とはいえ、正確に言えば使えなくするのが目的だから、誰にも使えなくなるのなら、封印する必要もない。」

凜がまだ、何か言いたそうだが気にしない。

「さて、遠坂さんだったね？

この地の管理を任されているセカンドオーナーがたしか、遠坂という姓だったと思うんだが、貴女は、その遠坂のご息女か？」

「ええ、その通りよ。」

「本来なら、この地を訪れた時点で挨拶に向うべきだったのだろうが初めて冬木に訪れた為に土地勘が無く、挨拶に行けずにいたことをお詫び申し上げます。」

そう言つて頭を下げる。

「お詫びの言葉、受け取りました。
ようこそ、冬木の地へ。」

タイミング良く、士郎が灰皿を持ってきたので、タバコに火をつける。

やっぱ、灰皿の無いところでタバコを吸うのはマナー違反だよなあ。

「気が済んだところで提案なんだが、同盟って組めない？
今のところ、キャスターとアサシンがこっちサイド。

あ、ところで今更だけど煙草吸つていい？
嫌なら縁側にでも移動するけど？」

「「えええええつ！！！」」

「何だと！！！」

「初耳ですよ！！！」

上から

凜&セイバー、アーチャー、彩斗。
士郎だけ着いてこれてない。

「うるさいなあ。近所迷惑だぞ？」

「そんなことは如何でもいいわ。」

何時の間に手を組んだのよ。
話を聞かせなさい。」

如何でも良いってことは、
ここでタバコ吸っても良いんだな？

「言ってもいいけど、その場合は
こっちサイドに来るってことでいいか？
この世の基本は等価交換。
見返りもなしに話が聞けるとは思っていないだろうな？」

「あら、見返りならあるわよ？」

「どんな？」

「貴方、さっき『お詫び申し上げます』って言ったわよね？」

「言った。」

「それに対して、私はなんて言ったかしら？」

「お詫びの言葉を受け入れる、だったな。
それがどうした？」

「私は受け入れただけ。許す、とは言っていないわよ？」

「さっき、ようこそ。って」

「ええ、受け入れたわよ。お客様として、ね。」

「一本取られた。そうくるってことは、
対価は許すということか？」

「そう考えてもらっても構わないわ。」

「土郎は場所の提供が対価ということで良いな。
返事は聞かん。」

どこまで真実を混ぜ込んだもんやら。

嘘の中の真実

タバコの火を消しながら少しずつ語る。

「冬木に来て、最初に柳洞寺に行っただわ。」

本当。

「そしたら、アサシンとキャスターに会った。」

本当。

「意気投合してな。色々と話をした。」

半分嘘。

「話をしているうちに、ふと疑問に思った。

前の聖杯戦争が起こったのが10年前、

冬木を大災害が襲ったのも10年前。

10年前に冬樹を襲った大災害は、聖杯戦争なんじゃないか。
そう思った。」

完全に嘘。そんな話はしていない。

「全く関係無いのかもしれないが、歴史や伝説に名を残す英雄達の戦いだ。」

大災害と無関係である可能性は低い。」

嘘。低いどころか、ありまくりです。

「そうすると、10年前の再来になる可能性は高い。そう言つて、停戦するように持ちかけた。

キャスターにせよ、アサシンにせよ

彼らの願いは現世に留まることでしか叶えられんのだから、現界を条件に同意した。」

完全に嘘。最後の方は合つてると思うけど。

「一応の辻褄は合つてゐるわね。」

「だろ？」

「その話が真実であるとは限らないわよね？」

「そりゃそうだ。俺の作り話かも、という可能性は否定できん。」

「でも、真実だとしたら、貴方の想像通りになるかもしれない。はあゝ、厄介ね。」

「ため息尽きたいのはこっちだ。」

今言つた理由で、現界したサーヴァントには停戦を申し入れているわけ。

つつても、キャスターとアサシン、この場にセイバーとアーチャー、明日の晩も来るからランサー。この5人には接触済み。

まだ会つてないのがバーサーカーとライダーの2人。

残りは約1/3。

いや、イレギュラーのテイカー入れて総数8人だから 残り1/4か。

片方でも同意しなかったら、この計画はその時点でアウトよ？

分かる、俺の苦勞？」

金ぴか王様が黙って話を聞いてくれると思えんしな。

・ ・ ・

「ところで、キャスターとアサシンの願いつて何なの？」

「アサシンは強い者との純粹な戦い。

キャスターは・・・聞いても笑うなよ？

笑ったらキャスターに、間違いなく殺されるぞ？

いや、殺されるだけで済んだら可愛いな。」

「笑わないわよ。」

「本当に笑うなよ？」

「笑わないってば。」

「キャスターの願い、それは・・・」

ゴクリ

「結婚だ。」

「ぶっ！！」

凜先生の聖杯戦争概要

「なあ、遠坂・・・」

「どうしたのかしら、衛宮君？」

「さつきから、聖杯とか戦争って言ってるけど、
いったい何なんだ？」

「貴方もマスターですものね。」

知る権利はあるわ。

説明してあげるから、よく聞きなさい。」

凜先生の簡単にわかる聖杯戦争。

7人の魔術師たちが「マスター」となり、「サーヴァント」と呼ばれる、

セイバー（剣兵）、アーチャー（弓兵）、ランサー（槍兵）、

ライダー（騎乗兵）、キャスター（魔術師）、アサシン（暗殺者）、
バーサーカー（狂戦士）のうち、

いずれかのクラスの使い魔を召喚して行う戦争。

遠坂、マキリ、アインツベルンの、いわゆる御三家が構想、システム化した。

以上のクラス以外で召喚された「サーヴァント」は、イレギュラーに分類される。

「マスター」と「サーヴァント」がペアになり、最後の1人になるまで戦い、

生き残った者が、あらゆる願いをかなえる聖杯を手にする。

負けた「マスター」は教会に申し出れば、保護される。

負けた「サーヴァント」は消滅するが、「マスター」が居ないだけなら、

「サーヴァント」が居ない「マスター」と組むことで戦線復帰できる。

「だいたい、こんなところかしらね。

分かったかしら、衛宮君？」

「要するに、魔術師達だけでやる、ガダムファイトみたいなものだな。」

特にガンムファイト国際条約第7条。

要するに、

冬木がリングだ！！

ってことだろ？

ガンダファイトが分かるかどうかは知らんけど。

ついでに言うなら、

この戦争は遠坂の（場所の）提供でお送りいたします。

「あ、ああ。

教会って、どこの教会でもいいのか？」

「冬木の教会よ。そこに監督者が居るわ。」

麻婆に祝福された神父だけだな。

絶対に行かねえ。

「先生、質問です。」

一応、参加者は監督者に挨拶した方が良いのか？
それとも、人数が揃い次第いきなり開始？」

「ん〜。」

気が進まないけど、挨拶に行くべきよね。
来いって言われてたし。」

「ラジャ。明日にでも行ってくるわ。」

「何言ってるの？
今から行くわよ。」

衛宮君も聞きたいことがあれば、監督者に聞きなさい。」

「あの〜・・・」

「お、テイカーも質問か？」

「アーチャーさんに質問なんですが・・・」

「何かね？」

「はい。」

霊体化ってどうやるんですか？
この時間に、僕みたいな子供が歩いてるのは、
流石にまずいと思うので、霊体化しようと思うんですけど
出来ないんです。」

そっぴや、データ化した経験は豊富だけど、霊体化した経験はなか

ったな。

つか、設定上、魔術とは真逆の方向性で生まれたわけだし・・・
ずっと実体化させっぱなしで気にしてなかったからなあ・・・
まいったね、こりゃ。盲点だった。

凜先生の聖杯戦争概要（後書き）

先日、「嫌なら読むな」と言われそう という意見を頂きました。
基本的には、その通りです。

しかし、無条件で「嫌なら読むな」とは言いません。

感想に「作品を削除した方が良い」とか「書くのを辞めた方が良い」
みたいな、

この作品をお気に入り登録してくれている

他の読者さんを侮辱するような内容でないなら、

感想は自由です。

加えて、もう一言書かせてもらいますと、

「書かない方が良い」とか「作品を削除した方が良い」っていう感想は、

私にとって

「俺はピーマンが嫌いだから、店からピーマンを全て撤去しろ」
というクレームと同レベルの感想です。

ハッキリ言っと、問題外です。

面白いか面白くないかは、読者さんの判断に任せますし、
「面白くない」という感想もそれはそれで受け止めます。
漠然と「面白くない」だけ書かれても、困りますが。

しかし、「書くな」等という感想に限り、
引つかからない程度に暴言を吐かせていただきますので、
その点はご了承ください。

以上、お目汚し失礼いたしました。

教会へ御挨拶

結論から言うと、

結局、彩斗は霊体化できなかった。

デフォルトで死んでるようなモンだからいけると思ったが、
そういうものでもないらしい。

仕方がないので、士郎から鞆を借り、塾帰りを装うことにした。
俺が保護者で。

問題は、

物語通りなら、教会からの帰りがけにイリヤ主従に襲われる って
ことなんだよなあ。

鞆、無事に返せるかな・・・

ってなことがあって、俺、彩斗、士郎、セイバー、凜の5人で教会
に向ってる。

一目で分かる黒幕 に会ったぜ？

しかも、人格破綻者のレッテル貼られた非常識人。

憂鬱にもなるわ！！

現実逃避に、

なんでトマトは赤いんだろう？

とか

沖縄産の黒光りするGは本州のGよりも巨大らしいが、
だったら赤道付近のGは更に巨大なんだろうか？

とか、

本気でどうでもいい事を考えてたら、何時の間にやら教会についてた。

到着したくなかった。

「綺麗、居る？」

マスター連れてきたわよ。」

扉を開けるなり、凜が大声で麻婆神父を呼び出す。

親しき仲にも礼儀あり って知ってるか？

親しい仲だとは思わんけど。

「このような夜更けに来るとは関心せんな。
だが、よく来た。」

長身の神父が奥から現れる。

コイツが黒幕か。

言峰は俺と士郎を見比べ

「それで、どちらがマスターなのだ？」

よもや、2人で1人のマスター等とは言うまいな？」

生憎、俺も士郎も、

ガイアメモリを持ってなければ、探偵でもない。

当然、変身だつてできない。

士郎の場合は将来的に変身する・・・のか？

「たしかに、俺も少年もマスターだ。

もつとも、別々のサーヴァントを召喚したから、
期待に応えられないようにで申し訳ないがな。」

そう言つて右腕の靈呪を見せる。

「そっちがセイバーのマスターで、俺はティカーのマスター。イレギュラーらしいが、一応報告しとく。」

「ふむ。サーヴァントが8騎となつたか。前例の無いことではあるが、規定のサーヴァントが揃つた。よつて、今ここに聖杯戦争の開幕を告げよう。」

「用事は済んだわ。」

衛宮君が聞きたいことが無いなら、私達はこれで帰るわよ。」

そう言つて、踵を返す凜。

質問させる気無いだろ？

「待て、衛宮と言つたな。」

もしや、衛宮切嗣の息子か？」

俺ではなく、士郎の方を見ながら尋ねてきた。

「そうだけど・・・。」

「そうか・・・ 衛宮切嗣の息子か。」

綺礼は何が面白いのか、笑い出した。

「喜べ少年。お前の望みはようやく叶う。」

「どういうことだ？」

思わず士郎が聞き返す。

「お前は正義の味方になりたいのだろう？」

正義の味方が正義に味方たるには、常に悪が必要となる。

数日前まで起きていたガス事故は知っているな？

あれは呼び出されたサーヴァントが引き起こしたものだ。」

あれ、そんなセリフだったっけ？

事故の方は自重してもらったから起きていないだけだけど、今の士郎だったら、キャス子の所に殴りこみかねんな。

「士郎、帰るぞ。」

余計なことを聞いて熱くならん方がいい。

怒りは焦りを呼ぶだけだ。」

士郎を刺激するのはマズイと思い、どこかで聞いたような台詞を吐く。

「クツクツクツ。」

脱落した時はここに訪れるといい。

何時でも歓迎する。」

人を不愉快にさせることに関しては一級だとは思っていたが、想像以上だ。

百聞は一見に如かず とは、よく言ったものだ。

賭けないか？

ある〜日〜 町の中〜

イリヤに〜出会っ〜た〜

バーサーカー従えた〜

イリヤに〜出〜会っ〜た〜

（森の熊さん風に）

期待半分、恐怖半分だがシナリオ通りですな。

「こんばんわ、お兄ちゃん。

無事に呼び出せたのね。」

「イリヤ？こんな時間に何してるんだ？」

いやいやいや、士郎！！

後ろ後ろ〜！！

バーサーカー居るから。

下手に刺激すると危ないから。

不審者が出たって、バーサーカーが居るから

危害が加わるのは、イリヤに声かけた不審者の方だから。

「お兄ちゃんは私の獲物なんだから、
誰かに負けちゃダメなの。」

「んつと、士郎。こっちのお嬢ちゃんは誰？」

知ってるけど。

初対面は初対面だ、問題ない！！

「そっちのオジサンは、はじめまして。

私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。
バーサーカーのマスターよ。」

「オジサンは酷いなあ、俺はまだ30前だぞ？

まあ、それはおいといて。

自己紹介されたんなら、返さないのは無粋というものだ。」

一拍おいて、自己紹介を返す。

決して、バーサーカーにビビったわけじゃない。

「ゲーテン・アーベント、フロイライン・アインツベルン。

俺は山本朝夜。イレギュラークラス、テイカーのマスターだ。
テイカー、自己紹介。」

「えっと、テイカーです。

よろしくね、イリヤちゃん。」

初対面で愛称にちゃん付けかよ。

やるな、彩斗。

握手しようとしなかったのは正解だろう。

「付け加えるなら、知ってるとは思っけど、

こっちの黒髪のお嬢ちゃんが遠坂凜。

そっちの赤黒いのがそのサーヴァント。

金髪のお嬢ちゃんが士郎のサーヴァント。」

服は赤で、肌は黒いから分かりやすいだろう。

白髪も勘定するなら、赤白黒になるがw

「聞かれてもないのに、ご丁寧に。
じゃあ、殺しあいましょう。」

待て。

その返事はおかしいだろう。

「士郎、凜。

フロイライン・アインツベルンと交渉したい。
ここは俺に任せてくれないか？」

イリヤも桜も救いたいし、極力戦いたくない。
爺の頼み？知ったこっちゃねえ。

「イリヤスフィール嬢、聖杯戦争は始まったばかりだ。」

「そうね。貴方を最初の脱落者にしてあげるわ。」

うわぁ・・・

殺る気満々ですよ、このお嬢ちゃん。

「魅力的なお誘いだが、一つ賭けをしないか？」

「賭け？」

「そう、賭け。

テイカーとバーサーカーが戦ってる間に
バーサーカーの真名か、宝具を当てたら俺の勝ちってことで
その段階で何もせずに帰ってもらいたい。

当てる前にテイカーが負けたら、俺の負けだ。

俺が知ってる範囲で、他のサーヴァントの情報を教えよう。
その後は好きにするといい。」

俺、原作知識がある分だけ、卑怯なくらい有利。
適当なタイミングで真名当てとこつ。

「いいわ。私のバーサーカーは無敵だもん。
そんな子供になんか負けないんだから!!」

掛かったw

賭けの結果は・・・

「さて、賭けとはいえ死合うには立会人が必要なな。士郎のサーヴァント、立会人を頼む。

凜、お前は自分のサーヴァントに手を出させるな。」

性格上、セイバーだったら騎士道精神に則ろうとするだろうし手は出さないだろう。

アーチャーだったら、不利な方に攻撃してきかねない。

士郎だと、逆に不利な方を庇いそうだし、

凜は手は出さない代わりに、イリヤにガントを撃ちかねん。

我ながら妥当な人選かな？

ランサーかアサシンが居ればベストだったんだろうけど。

「では、私が立会人を勤めさせていただきます。」

俺がP・E・T.を手にした途端、空気が張り詰める。

試合ではなく、死合いの雰囲気ってヤツか。

彩斗は、インターネット世界とはいえ、何度もこんな修羅場を越えてきたのか。

「はじめー!」

「ー!」

セイバーが開始を告げると同時に、バーサーカーが雄叫びを上げながら突進してくる。

巨体に似合わぬスピードだ。

ポケットに右手を入れ、

「妖精眼。」

右眼の妖精眼をオンにし、

「テイカー、右後ろに2mバック。

チャージしながら回避、7秒後にバスター発射。
左上25〜30度!!

次いで、バスター連射で3秒牽制。」

彩斗は無言で指示に従う。

なんで分かるかって？

光ってるからさ。(チャージ中)

バーサーカーの振るう石剣だか石斧だかをスレスレでかわす。

巨体つてのは、的がデカいがリーチも長い。

7秒経つたのだろう、

「チャージバスター!!」

彩斗の右腕から20cm程の光弾が発射される。

ドゴオオオオン!!

「!？」

指示した通りに当たる。

見たことのない攻撃に驚いたようだが、怯む様子は無い。
多少は効いたっぽい、やっぱバスターじゃダメだな。

バスター連射は効いてない。
ということは、チャージバスターでギリギリBランク相当ってことか。

連射が終わると同時に、バーサーカーが拳を振るい、彩斗が5m程吹き飛ぶ。

PA使わんことには倒せそうにないな、これは。
あんましダメージを喰らうと、彩斗が獣化して
バーサーカー頂上決戦になりかねん。

2、3度のステップでバーサーカーが彩斗の眼前に迫る。
そのまま、石剣を振りかぶり・・・

「バトルチップ、テンジヨウウラ。スロットイン!!」

バーサーカーの剣が彩斗に当たる寸前で彩斗が消え、
代わりに手裏剣が3つ降ってくる。

「バトルチップ、キャノン、キャノン、キャノン。スロットイン!!」

「プログラムアドバンス、ギガキャノン!!」

プログラムアドバンスは

特定のバトルチップを投入しなければならない。
正しい順番で投入しなければならない。

1回のバトルで使用できるのは1度だけ。
などの制約がある分、

その威力はバトルチップ単品の威力を凌駕する。

彩斗の姿が消えたことで、目標を見失ったバーサーカーの側面からチャージバスターが子供騙しに思えるような光弾が発射される。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

— — — — — ! ! ! ! !

まともに当たり、今度はバーサーカーが吹き飛ぶ。

「追撃しろ。」

バトルチップ、ソード、ワイドソード、ロングソード。スロットイン！」

「プログラムアドバンス、ドリームソード！」

一瞬で間合いを詰め、バーサーカーに斬りかかる。

ザ
シ
ユ
ツ
！
！

!!!!!!

————— ! !
L

左肩から袈裟斬りに切り裂かれ、

断末魔のような咆哮を上げると、鉄色の巨人は絶命した。

「お兄ちゃん、すごいね。」

バーサーカーを1回でも殺すなんて。

そう。バーサーカーには残り11回の命のストックがある。

それがバーサーカーの宝具、『十二の試練』。

イリヤの言葉の意味を理解したのか、経験がそうさせたのか、イリヤの声に反応して、彩斗が再び構える。
頃合だな。

「解析終了だ、フロイライン。
君のサーヴァントは、おそらくギリシアの大英雄ヘラクレス。
そうだろう?」

俺は右眼をおさえながら
賭けを終わらせる、その言葉を発した。

俺の半分は嘘で出来ている

「解析終了だ、フロイライン。

君のサーヴァントは、ギリシアの大英雄ヘラクレス。そうだな？」

間違いなく当たってる。知ってるから。

「凄いね、お兄ちゃん。

どうして分かったの？」

目を丸くして、本当に不思議そうに質問してくる。

シナリオ通り、自分からバラしたのならともかく、5分にも満たない攻防で、

自分のサーヴァントの真名がバレれば、当然だろう。

「ん」。まずは、その巨体だな。

巨体の英雄は、たくさん居るだろうけど

それでも、平均身長以下の英雄は除外される。

これで、ほとんどの英雄が該当できない。」

もっともらしく言う。

「次に、服装と装備。

上半身裸で、棍棒っぽいものを持つてる。

剣みたいに見えるが、見た感じ石で出来てるだろ？

つまり、切れ味は無視して、威力と頑丈さだけを選んだ武器と言うことになる。

切れない剣は棒と同じだが、重さがあればどっちも鈍器だし、立派

な武器だ。

服装の方は、古代ローマ以前の彫刻などに似ている。

最初はゴリアテかと思ったけど、

その場合、万が一にでも、アーチャーとしてダビデが限界してたら即死確定。

用意周到なアインツベルンがそんな愚行をするわけないだろうから、これも除外。」

石が当たって死ぬんだぜ？

頑丈でも嫌だ。

「となると、だいぶ絞られてくる。3つ目のキーはクラスだ。バーサーカーは、知名度の低い英霊を強化するのに有効だが生前に狂った事がある方が相性が良い。」

ということらしいが、本当かどうかは知らん。

「4つ目。1度殺したが復活した。

つまり、一度は冥府に行って、しかも帰ってきたことがあるということになる。

そうになると、ヘラクレスしか考えられんよ。

彼は狂った際に、自分の子を殺してしまい

その贖罪として、神から12の試練を受けることになった。

その1つとして、地獄からケルベロスを連行してくるというものがあつた。

1度倒しても復活したのは、その逸話からだろう。

おそらく、その逸話を宝具としたんじゃないか？」

宝具の『十二の試練』については、正確には分からないフリをしておく。

この表現でも納得するだろう。

「俺が読んだ伝承と違って、獅子の皮を着ていなかったからヘラクレスかどうかは博打だったが。」

獅子の皮を着てりゃ、初見でも分かっただろうな。」

大げさに安堵してみせる。

「以上だ。何か質問はあるか？」

そう問いかけると、

「じゃあ、バーサーカーと戦ってる時にお兄ちゃんがしてたのは何？」

『なんとか、スロットイン』とか言ってたけど。」

あゝ、バトルチップね。

「その質問に答える前に・・・」

テイカー、お前の情報を一部開帳することになるが良いか？

勿論、お前に不利になるようなことは言わんが。」

一応、許可は得ておこう。

彩斗のことだから、OKするだろうけど。

「いいですよ。」

ほらな。

予想通りだ。

「アレは戦闘記録媒体という。」

ティカーがかつて英雄と呼ばれるに相応しい偉業を成し遂げた時、ティカーのパートナーが、ティカーを補助する時に用いていたものだ。

効果は様々で、剣や銃といった武器になったり、バリアをはったり、炎や風を起こすこともできる。

その気になったら、たぶんヘラクレスを完全に殺せるぞ?」

伝承の再現。

つまり、毒状態にした後、焼き殺す。

他の英霊達は10回以上、ヘラクレスを殺さなければならぬのに、彩斗の場合、ヘラクレスが死んだ状況を再現することで、理屈の上では、1回で完全に殺しきることができる。

「ティカーって何者なの？」

そんな話は聞いたことがないわ。」

「そりゃそうだろう。」

だつてなあ・・・

「ティカーは、異世界の英雄だからな。」

異世界な上に、架空の世界だが。

「かくいう俺も異世界人なんだな、これが。」

この世界に着いた時、聖杯戦争にイレギュラーとして参加するように指示されていたな

戦争さえ終われば、聖杯が無くても帰れる契約になっている。そついう意味では、勝とうが負けようが、

生き残りさえすりゃ、どつちでもいいんだが負けるのはイヤなんですね。

色々調べさせては貰った。

その結果が十年前の大災害だ。」

士郎と凜が顔を見合わせる。

「フロイライン・アインツベルン。

アレの責任を取れ、なんて言う気はサラサラないから安心していい。君は、君が知らない間に十分以上に贖罪をした。」

「?」

「甘えたい盛りの幼子にとって、知らない間に両親と死別する以上の贖罪はあるまいよ。」

「貴方、どこまで」

「はい、ストップ。

今まで親に甘えられなかった分は、士郎に甘えるなり、お姉さんぶるなり

好きにするといい。」

「なんでさ!?!」

「俺から説明してもいいかい、フロイライン?」

「お願いするわ。」

「士郎、彼女の母親の名はアイリスフィール・フォン・アインツベ

ルン。

そして、父親の名は・・・」

「ま、まさか」

「衛宮切嗣。」

お前の義理の父親だ。

彼の名誉のために補足しておく、10年前の聖杯戦争終了時、彼は瀕死の少年を発見、養子とした。

その後、何度も娘を引き取りに行くも

聖杯を入手できなかったことを理由にアインツベルンから拒否され、門前払い。

そして現在に至る。」

士郎とイリヤが見つめあう。

一歩間違ったら犯罪だな。

「要するに、だ。」

彼女はお前にとって、義理の姉になるんだよ。

俺の調べでは、彼女は18歳の筈だ。」

「~~~~~ええええええ~~~~~
~~~~~っ!!~~~~~」

彩斗、士郎、凜。絶叫するな。近所迷惑だ。

セイバー、お前は前回会ってなかったか？それとも、俺の記憶違いか？

アーチャー、何をニヤニヤしているんだ？

俺の半分は嘘で出来ている（後書き）

EXE式ヘラクレスの殺し方

PA・ポイズンファラオ

ヒートマン召喚

or

ヒートXロ

ックマン

猛毒

焼き尽くす

この物語に登場するティカー（ロックマン・EXE）は  
ベースをEXE6にしていますので、ヒノケンのナビはヒートマンで  
す。

問題は山積みなんだよ？

あれから、イリヤは思う存分士郎にくっついていてる。

見た目が幼すぎる姉がじゃれつく光景を見て、  
犯罪だと思っただおれは悪くないはずだ。

「さて、感動的な出会いに浸つてるところ申し訳ないのだが・・・」

不意に発した言葉に、一同が我に帰る。

「そろそろ帰らないか？寒い。」

今は2月。

春が近いとはいえ、夜の寒さは半端ない。

「それと、フロイライン。」

先ほど、俺が賭けに勝ったら帰れと言ったが、  
前言撤回だ。

すまないが、俺たちと一緒に来て欲しい。

少し、話がある。」

これで、イリヤ陣営を取り込めれば、残る正規の英霊はランサーと  
ライダーのみ。

ワカメが持つてる本さえ処理できれば、ライダーとの交渉は可能な  
はず。

ワカメは小物だから、全員でライダー襲うつて言ったら、こっちに  
来そうだ。

でも、できりゃライダーは桜と組ませたい。

ランサーはキャス子さんにどうにかして貰うとして、

それでも、王様が残ってるからなあ・・・

王様、どうしょ？

セイバーで釣れるかな？

チャキッ

「・・・

セイバーさん、その見えない剣は何でしょうか？

というか、何故俺に向けられているのでしょうか？」

「・・・

なにか、不穏なモノを感じましたので。」

「・・・

気のせいですよ、きっと。」

「・・・」

「・・・」

「ねえ。」

王様の直感スキルSUGEEEEEEEE！！って思いつつ黙ってたら

今度は凜がおそろおそると言った感じで声をかけてくる。

今のセイバーと俺に切り込んでくる勇気は買おう。

「どうした、凜？

何か分からない点でもあったか？」

大体のことはハグらかすけどね。  
口先三寸で。

「アーチャーの真名も分かる？」

・・・はいよ？

ああ、そういや記憶障害って設定なんだっけ。  
後ろでアーチャーもびっくりしてる。  
面白そうだ、からかってやろう。

「情報さえ集まれば、分かると思うぞ。

でも、なんでまた自分のサーヴァントの真名なんだ？

召喚した時に名前の交換くらいするだろ？

他のサーヴァントの名前を知りたいってんなら、まだ分かるけど。」

不思議そうにして聞いてやる。

「召喚した時に、ちょっとした事故があって  
アーチャーは記憶喪失なの。」

悔しそうに言う。

「そうか・・・

ちょっとした事故で記憶喪失か・・・」

「ええ。

ちょっとした事故で記憶喪失なの。」

ちょっとした をヤケに強調してくるが、

空中から屋敷にダイブするような召喚はちょっとした事故なのか？  
それだったら、たいていの交通事故は些細な事故だな、オイ。

「さっきも言ったが、情報さえ集まれば分かると思う。

ただし、可能性が高いであろう選択肢に限定されるだけで  
それが正解かどうかは分からないけどな。

問題は、可能性が高いだけであって正解かどうかはわからない。っ  
てとこだ。

下手すりゃ、それが原因でアーチャーを別人だと思い込む可能性も  
あるぞ？

ところで、凜。」

「な、何よ？」

「俺がクラスすら教えないように気を使ってたのに、  
お前、わざわざそれをぶち壊すか？

イリヤスフィールと同盟を組むかどうかは、  
まだ決まったわけじゃないんだぞ？」

「っ！？」

気づいたようだ。

俺はイリヤと遭遇してからは、彩斗以外はクラスで呼んでいない。

流星は噂に聞こえたウツ力凜。

遠坂の呪いは健在だ。

イリヤのことだから、士郎が居るからこっちに来ると思うけど。

「まあ、クラスは遅かれ早かれ分かるだろうし、

お前が良いなら、俺は一向にかまわんのだが・・・」

わざとらしく、ニヤリと笑ってやる。

「別に、今此处でアーチャーの真名を考えろというわけではないの  
だろう?」

そう言った途端、何故かアーチャーが弓に剣を番えていた。  
俺を狙って。

「アーチャー、ストップ。  
スト~~~~ストップ!!」

それ、洒落にならんから。  
情報が集まるけど、その直後に死ぬから。

「止めなさい、アーチャー。」

「凜?

私は、私の真名を知られる可能性を排除しようとしたただけだぞ?  
彼とは敵対関係にないだけで組んでいるわけではない。

それに、あの少年を見ただろう?

あのヘラクレスを倒してしまうほどの英霊だ。

ならば、この場で倒してしまうのが得策というものだ。」

「じゃあ、私は彼と同盟を組むわ。

それだったら、文句ないでしょ!?」

「っ!」

「決まりね。山本さん、私達は貴方達と同盟を組みます。  
よろしくね。」



「ああ、よろしく。」

・ ・ ・

「ところで、英霊の記憶喪失って、  
霊祝で『思い出せ』って命令しても無理なのか・・・？」

「あー！！

コホン。

「・・・貴重な霊祝を無駄使いできるわけじゃないじゃない。」

「1つ目の霊祝で『従え』って命令したヤツのセリフとは思えねえよ。  
とりあえずさ、みんなで衛宮家に帰ろう？  
寒い。」

アーチャーの真名は？

というわけで、イリヤ組を加えた俺達は衛宮家に帰ってきた。  
ハードな時間だったぜ。  
まったりしてたら

「アーチャーの真名は分かった？」

凜が聞いてきた。  
もう少しまったりさせる。

「うんにゃ、情報がありすぎて逆に分からん。」

否定してやった。

「どういうこと？」

「説明してやる。質問があっても後回しにしてくれ。」

メモとペンを出す。

「まず、肌が黒い。

俺の偏見かもしれないが、

これは東南アジアか赤道付近か、その辺の住民の特徴。」

東南アジアか赤道付近？ と書き込む。

「次に、服装。

ロングコートっぽい服だから、ルネッサンス以降の人物。」

1600年代以降のヨーロッパ？ と書き込む。

「最後に武器。

最初に会った時は中華剣が2本。

でも、さっき俺に向けてた弓は和弓で、矢はクリスナーガっぽいグネグネした剣。」

中華剣 中国？

和弓 日本？

クリスナーガ？ 北欧？ と書き込む。

「こんな一人多国籍軍みたいな英霊なんて、逆に思いつかねえよ。つか、該当したら該当したで分かんない筈ねえよ。」

「どういうこと？」

「お前は分かんたろうけど、

和弓は洋弓と違って、上が長くて下が短いから

あの弓はたぶん間違いなく和弓。

和弓は日本独特の弓。」

和弓に丸を書きなぐる。

「でも、剣が中国産、矢が北欧産。」

中国と北欧にも丸を書きなぐる。

「要するに、所属してる国というか地域が統一されてないんだよ。」

ヨーロッパにも丸を書きながら答えた。

「金色の鎧でも着てりゃ、英雄王で決定なんだろうが、生憎、アーチャーが着てるのは赤いコートだろ。服装が違う。」

「英雄王!？」

『キーワード：英雄王』にセイバーが反応した。金色の鎧のほうか？  
どっちでも良いけど。

「ん？英雄王がどうした？」

「答えてください!!  
英雄王とは、

あの金色の鎧を纏った英霊は誰なのです!？」

求婚された相手のことは気になるってか？

「お前の言う『あの』ってのがサッパリ分らんのだが、俺が言う『金色の鎧を纏った英雄王』なら、ギルガメッシュ。それがどうした？」

セイバーの雰囲気がおかしい。

イリヤですら、士郎にじゃれつくのを止めている。

「言おうか言うまいか、迷っていたのですが  
実は、私が聖杯戦争に参加したのは初めてではありません。」

「そりゃそうだろ？」

セイバーに該当すりゃ、同じ英霊が召喚されても変じゃないと思うけど？」

「そういうことはありません。」

私は、前回の聖杯戦争にもセイバーとして現界し、マスターと共に勝ち残りました。私には、その記憶があります。」

「その何が変なのか、英霊じゃない人間には分からるので疑問点だけブリーズと、その前に・・・」

イリヤスフィール嬢、これ以上を聞きたければ俺達と同盟を組んでもらおう。

同盟を拒否するなら、士郎に寝室を用意させるから寝てくれ。」

拒否しないだろうけどね。

「うん、いいよ。」

アサヤ達と組んだげる。」

ほらね。

「セイバー、続けてくれ。」

「はい。」

私は前回の戦争において、セイバーとして現界し、最後まで勝ち残りました。

最後に戦った相手は金色の鎧を纏った英雄王を自称する男でした。

彼はアーチャーとして現界していました。」

「最後まで？」

と言うことは、お前さんのマスターは……」

コクン。

「はい。」

私のマスターは衛宮切嗣。

士郎とイリヤスフィールの父親です。」

本日幾つ目のカミングアウトだ、これ？

「ほんじゃ、質問。

そのアーチャーは、金色の鎧を着ていて、英雄王を自称していた。これに間違いないな？」

「はい。」

「世界最初の英雄らしいから、

ギルガメッシュだったとしたら英雄王と言って過言じゃない。

次の質問。

ソイツは、複数の武器を使っていたのか？」

「はい。」

使う武器の全てが宝具でした。」

「世界中の財宝を手に入れたって書かれてたから、たぶんその事だな。

んじゃ、最後の質問。

ソイツのマスターは誰だった分かるか？」

質問ついでに爆弾投下。

「はい、忘れもしません。

切嗣は彼を最大の障害だと認識していたようです。」

「それは誰だ？」

「金色のアーチャーのマスター、それは・・・」

「私の父、遠坂時臣よ。」

凜が立ち上がった。

残念、ハズレだ。

「いえ、違います。

アーチャーのマスターの名は言峰綺礼。

私のマスターだった切嗣と互角に戦った男です。」

アーチャーの真名は？（後書き）

アーチャー違いです。



## 迷宮入り？

「黄金のアーチャーのマスターの名は言峰綺礼。私のマスターだった切嗣と互角に戦った男です。」

「嘘よっ！！」

凜、分かるけど落ち着け。

「嘘ではありません。」

「体験してきた証人がそう言うんだったらそうなんだろう。で、凜。」

嘘とは？」

「だって、綺礼のサーヴァントはアサシンでしかも、最初に脱落したはずなのよ！！」

裏切ったの知らないんだな。どうしょ？

「綺礼って、あの神父か？」

士郎が爆弾追加。

「そうよ！！」

「まあ、落ち着けよ凜。」

焦りだの怒りだの、負の感情は悪い考えしか呼ばん。

考えられるのは幾つか。

まず、時臣氏が何らかの事情で戦闘不能になり、神父がアーチャーを引き継いだ。」

メモの次のページに

時臣氏戦闘不能？ と書き込む。

「これはなんら不思議じゃない。

次に、そもそも召喚したサーヴァント自体が記録と違う。

つまり、神父が召喚したのがアーチャー、

時臣氏が召喚したのがアサシン。」

神父：アーチャー

時臣：アサシン と書き加える。

「情報操作は戦闘の基本だ。

これも不思議じゃない。

でもって、3つ目。

アーチャーか神父か、あるいはその両者が

時臣氏が知らない間に、勝手に手を組んだ。」

アーチャーor神父の裏切り と書き加える。

「まあ、現状で考えられるのはこの3つだろうな。」

全員がメモを凝視している。

「朝夜、貴方はどう思う？」

凜、冷静になってきたか？

「どれも考えられるが、  
敢えて順位をつけるなら、1 3 > 2 だな。」

「その根拠は？」

根拠ときたか・・・  
ハグらかせるかな？

「まず、2つ目だが  
どうせ、最後まで戦えばいずれはバレる。  
やるメリットはほとんど無い。というか、皆無だ。  
3つの中では、もっとも確率が低い。」

×を書き加えて

×神父：アーチャー

×時臣：アサシン にする。

「3つ目だが、俺の調べでは  
あの神父は時臣氏の弟子だった筈。  
時臣氏が生き残ってしまえば、  
裏切りのメリットよりも、報復の方が大きい。  
しかし否定はできない以上。」

アーチャー or 神父の裏切り にする。

「最後に1つ目だが、  
アサシンを倒された神父とマスターが倒されたアーチャーが会い  
ネバーギブアップの精神で戦線復帰した。  
これは十分ありえる話だが、敗者は教会で保護される。」

保護された神父が、アーチャーと出会う可能性は高くないだけで、ありえないとも言いきれない。よって、これも。」

時臣氏戦闘不能？ にする。

「優先順位だけなら、どこかで出会って戦線復帰のほうで、まだ自然。」

というわけで、1 3。」

全員が黙り込む。

「まあ、あれだ。

終わったことだし、凜には悪いがこの話は終わり。

セイバーが前回の勝者だったんなら、そのアーチャーはもう居ないわけだし。」

ちやっかり残ってるけどね。

「そ、そうね。

ごめんなさい。」

全員がメモから目を離す中、

セイバーだけがメモを凝視している。

「どうした？」

「いえ、何か嫌な予感がするのです。嫌な予感が……」

メモから目を逸らさず<sup>に</sup>それだけ答える。  
王様、あんたスゲーよ。  
その予感<sup>は</sup>、嫌なことに大当たりだ。

## 現時点での話せる範囲で状況整理

「さて、と。」

イリヤスフィールとバーサーカーが仲間になったし、改めて状況を整理するか。」

イリヤはこっち側に来てても状況が分からんだろうからな。

「まず、俺の目的は聖杯の封印もしくは破壊。

結果として誰にも使用できなくなれば良いから

割と本気でどっちでも良いけど、できれば前者希望。」

「？

なんで？」

あゝ。

やっぱり分かってないな。

いや、知らされていないと考えるべきか？

「イリヤスフィール 「イリヤ!!」」

イリヤが仲間になったから言えるようになったが、

聖杯は第3回だったかな？

アインツベルンが召喚したサーヴァントによって呪われちゃっててな、

破壊でしか願いを叶えられん。

だから、使いたくないし、使わせたくない。

数時間前に俺が『言えない』と言ったのは、それを言っちゃまうと

お前らがアインツベルンのマスターであるイリヤを

色眼鏡で見ってしまう可能性が否定できなかったから。

ああ、士郎はそうでもないか。  
でも、凜。

お前とアーチャー、それにセイバーは性格が分かんかった。  
言っちゃなんだが、お前らもう少し丸くなれ。」

「余計なお世話よ!!」

「余計なお世話だ!!」

「余計なお世話です!!」

「お前らの性格はどうでも良いから置いといて。

イリヤ自身に罪は無いし、イリヤが償わなきゃならんような咎でもない。

ここまでOK?」

「どうでも良くないわよ!!」

というより、置くな!!」

「話が進まんから、強引に進めるぞ。

破壊できれば確実に誰にも使えなくなるけど、  
封印なのは、俺じゃなくてキャスターの要望。

それがキャスターを引き込むときの対価だったし。」

凜が 話が進まないのは誰のせいよ とかワメいてるが

あえて無視する。

本当に進まないし。

「ねえ、アサヤ達は何人で同盟組んでるの?」

「サーヴァントとマスターを1組とするなら6組。

マキリのサーヴァント以外は全員会ったから、マキリのサーヴァン

トは

イレギュラーが召喚されてなきゃライダーで確定だな。」

「それって、ほぼ全員じゃない。  
マトーも大変ね。」

「でも、ランサーがどう動くか分からんよ。  
ランサーとライダーが同盟組んで、こつちを狙う可能性もある。  
サーヴァント6騎相手に正面から来るとは思えんが、  
油断は禁物だろうし、最悪は想定しておくで後で気が楽だ。」

備えあれば憂いなし ってね。

「それに、ライダーは分からんが、  
ランサーは寧ろ喜んで戦いに来る気がする。」

「あれ？」

「どうした、イリヤ？」

「サーヴァントの数が合わない。」

「俺とテイカーがイレギュラーで参加したからな。  
そのせいだろ。」

まあ、シード枠・・・じゃないな。  
飛び入り参加だと思ってくれ。

俺の方で把握できてる同盟メンバーは  
まず、俺とテイカー。

士郎とセイバーに凜とアーチャー、それにイリヤとバーサーカー。  
この場に居ないけどキャスターとアサシン、それに彼らのマスター。



「この6組が同盟関係。」

キャス子さんがアサシン召喚したのは黙ってよ。  
何故かって？

男の感さ。

「それとは別なのがランサーとライダー。」

ランサーのマスターは不明だが、明日というか今日だな。

晩飯を食いに来るから、そんな時にでも誘ってみるわ。

ライダーの方は・・・

凜、多分近いうちにマキリの方から同盟組もうつて言ってくると思うからそんな時に脅しというて。

ランサーとライダー以外は全員組んでるから誘うだけ無駄だし、敵に回るんだったら容赦しないってな。

ありゃ、調べた感じ小物だ。」

「・・・キャスターがこつちに居るんなら、

学校に仕掛けたふざけた結界を解くように伝えてくれないかしら？」

ふざけた結界？

ひょっとしなくても、誤解発生？

「学校の結界？」

「そうよ。学校に結界が仕掛けてあったから私達は放課後、それを調べてたの。」

ランサーと交戦したのは計算外だったけど。」

士郎はそれに巻き込まれたわけね。  
知ってたけど、不幸体質ってやつか？

「たぶんそれ、キャスターじゃないぞ？」

「どうして？」

貴方がキャスターを庇うんだったら、私たちは抜けるわよ。」

「ふざけた結界って事は、危ない代物だろ？」

だったらキャスターが学校に結界を張る意味は微塵も無い。

お前らの学校にはキャスターのマスターも通ってんだし。」

ただし、通学じゃなくて通勤だな。

たしか、凜の担任だっけ？」

知ったときの凜の顔が見物だ。

「キャスターは本気でマスターに惚れてるっぽいな。

想い人を危険にさらすような真似はせんよ。というより、できん。」

「証拠はあるんでしょうね？」

「凜。1つ聞く。」

「な、何？」

「お前、初対面のヤツから3時間も惚気話聞かされたことはあるか？」

「・・・は？」

「キャスターと会った時、俺はやられたぞ。そんなヤツが、想い人を危険にさらせるか？」

無論大嘘。

聞かされたら俺はアサシンを生贄にしても逃げる。  
でも、実際に結界を張ったのはライダーの筈だから  
キャスターじゃないのは事実。

明日というか今日辺り、この辺の嘘を纏めてキャス子さんに報告して  
話を合わせてもらうように頼んどこ・・・  
食い違ったら面倒だし。

「まあそういう訳だ。

受動的な守護系の結界とかなら分かるが、  
能動的な攻撃系の結界だったら間違いなくキャスターじゃないと断  
言できる。

ランサーにも出来んことは無いだろうけど、犯人はほぼ間違いなく  
ライダー。」

「ランサーにも出来る？」

「ランサーの真名は・・・  
やっぱ止めとく。

本人がマスターの許可なしに真名をバラすのはフェアじゃない。」

「何だよ!？」

「何でって、交渉次第では味方になるかもしれんし。」

「それって敵になるかもしれないって事よね？」

「そうだけど、敵になったのが確定してから教えたって遅くはない

だろ。

どうしても聞きたきゃアーチャーに聞け。」

「何故そこで私にふる！？」

「ん、男の感？」

スマン、俺が悪かった。謝るから弓向けないで。

今のは流石に冗談で、実際に戦ったお前さんなら気づいたと思うたから。

気づいてなかったとしても、近いうちに気づくだろっし。」

戦ってるときに『アイルランドの光の御子』とか言ってたし、士郎の時の記憶で知ってるのか、アーチャーとして戦って分かったのかは知らんけど

アーチャーが、『ランサーが誰なのか』を知っているのは確かだ。

「それも男の感かね？」

それとも、何かの冗談かね？」

「うんにゃ、両方ハズレ。

こいつは俺の確信。」

灰皿を引き寄せながらタバコに火をつけ、  
燻らせながらそう言う。

「ずいぶんと買いかぶられたものだ。」

「過小評価しないだけだよ、アーチャー。

ひよっとしたら、俺なりの先人に対する敬意かもしれんがね。」

悪い気はしなかったのか、鉄面皮だったアーチャーが苦笑したように見えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5458p/>

---

聖杯戦争、イレギュラー入り

2011年9月12日15時15分発行